

妹が好きらしい婚約者に婚約解消を求めたら、溺愛中出しSEXで既成事実を作られ、身も心も溶かされました

サンプル（一部抜粋）

私はいつも妹に全てを奪われる。

親からの愛も、恋愛も…そして婚約者すらも。

もう慣れた。

私は選ばれない方の失敗作だ。

私は少し裕福な家で育った普通の女だ。見た目は中の中だし、中身だってパツとしない。ただ親が裕福なだけの人間で…特別な才能も何もなかった。

だけど私の3歳年下の妹・明菜は、私とは真逆の可愛い女の子だった。

見た目もいい、人から愛される子…。私はそんな明菜と比べられる事が多かった。

勉強も顔も何もかも明菜に劣っている私に、両親はよく

「明菜を見習いなさい」

「明菜みたいにニコニコすればいいのに……可愛くない……」
と言われていた。

明菜は……ぬかりない。

私と喧嘩になると、いつもすぐに泣くフリをして

「お姉ちゃんに虐められた……」

って両親に助けを求める。

可愛い明菜はそれだけで守ってもらえる。可愛くない私は、いつだって悪者だ。

『お姉ちゃんなんだから』と色んなものを我慢させられ、『出来ない失敗作』として劣等感を植え付けられて生きてきた。

そんな私に婚約者がいる理由は……私もよく分かっていない。

ただ父の会社の取引先の社長が、私の事を指名した……らしい。父は取引先だし、相手の方が大手だし断るに断れず……強制的に私が婚約する事になった……という流れだ。

「好きでもない人と結婚しなきゃいけないなんて、お姉ちゃん可哀想。」

なんて明菜に言われたけれど……その顔は、にやけていたな。

(中略)

「ねえねえ」

隣で明菜が小さな声で耳打ちしてくる。

「うん？」

「さっきから柊さん、私の事チラチラ見てない？」

どこか嬉しそうな声。

「そう…かな。」

「私、柊さんの見た目、結構タイプなんだけど。お姉ちゃん、私に柊さん譲ってよ。クスクスと笑いながら耳元でそんな事を言われる。」

「……」

私は何も言えずにただ下を向く。

「本当に小春の方でいいんですか…？」

父が不安そうに柊さんにそう聞いているのが聞こえる。

「……ええ。構いません。」

柊さんの低い声。

私を選んでくれたのか、それとも誰でもいいのか…何か意図があるのか…その無表情からは何も読み取れなかった。

（中略）

「…まだ起きていたのか。」

柊さんは私をチラッと見てそう言うのと、私が居ない方のベッドの端に腰掛け、すぐに私に背を向けて寝転んだ。

それが一瞬拒絶のように感じたけれど…婚約者だし…同じベッドなのに、私がこのまま眠るわけにはいかないよね…？

ちゃんと奉仕しないと、私を選んだ意味がないと思われてしまうかも…。

ちゃんと…利用価値があることを…理解してもらわないと…。

私は何度も深呼吸をして、自分のパジャマのボタンに手をかける。

「…あ、あの…」

小さな声で大きな背中に声をかける。

「…ん？」

柊さんはギシッと音を立てて、振り返って私を見る。

私は彼の顔を見る事ができない。色気に気圧されそうなのと…あと恥ずかしいから。

ただ指はボタンを一個ずつ着実に外していく。

「……なにしてんだ。」

柊さんが起き上がる音が聞こえる。

ボタンを外し終えたパジャマを、スルッと脱ぎ捨て、身体を晒す。

「…す、好きにして…ください…」

これくらいしか…できないので…」

きつと私の顔は真っ赤に染まっていたと思う。顔が痛いくらい熱かったから。手は小刻みに震えている。私、怖い…のかな。でも…頑張らなきゃ…。

数秒の沈黙。

ただど次の瞬間、

「……はぁ……」

と小さなため息が聞こえ、大きな手が脱ぎ捨てられた私のパジャマを拾ったのが見えた。

「……?」

ゆっくりと顔を上げると、どこか困ったような表情の柊さんが目に入った。

「あの…?」

「…こんな事はしなくていい。今お前にそういう事は、望んでない。」

柊さんはそのまま拾ったパジャマを私に軽く羽織らせ、スッと離れて背中を向けて眠ってしまった。

「…え…」

なんで…? 同じベッドで眠るんだよね…?

夜の相手くらいしか私に出来る事はないのに…?

あ、単に世間体の為に私と婚約した…とか？いや、でもそれなら明菜でも良かったんじゃない？
ううん、明菜なら可愛いから女の子として見ちゃうよね…。そっか。私が可愛くないから、女
として見れないから、ちょうど婚約者として都合が良かった…的な感じかな？

私は色々と頭を働かせ、自分が納得できる理由を見つけた。

…やっぱり自分は女としてダメなんだな。

せいぜい捨てられないように、大人しく従順にするしか…ないかな。

(中略)

柊さんは怒った表情をしたまま、私の隣に深く腰掛ける。
ギシッと彼の重みに引っ張られるように、ソファが沈む。

「…話って？」

いつもより、わずかに低い柊さんの声…。

私はぎゅっと握った自分の手を見つめながら、

「婚約を解消してください。」

と小さな声で呟いた。

「……」

柊さんからの返事はない。

「…どうか：明菜の事を幸せにしてあげてください。もう、全部知ってますから…。」

私は辛い沈黙の中にポツリポツリと、言葉を漏らす。

「…誰に、何を聞いた？」

低く怒りに満ち溢れた声…。

「…明菜から全部…です。」

顔合わせの時に明菜の事が好きになって…今も毎日…明菜と愛し合ってるんですよね…？」

「は…？」

わずかに歪む柊さんの顔。

「…とにかく。私は…もういいですから…。」

ありがとうございました。」

これ以上、言い訳なんて何も聞きたくない。

こういう結末になる事は…はじめから予想出来たこと。ただ…それだけだ。

私はスッと立ち上がって、荷物をもち、ペコッと頭を下げて玄関に向かおうとした。

ただどその瞬間、腕を強引に引っ張られ、反動で柊さんの膝の上に倒れてしまった。

「っ！」

慌てて起き上がろうとしたけれど、柊さんにぎゅっと手首を掴み直され……うまく逃げられなかった。

「や……痛い……」

「……俺が、なんだって？」

「……え……？」

「俺が、誰と何をしているって？」

柊さんは、今まで見た事もないほどに、怒っている顔をしていた。

(中略)

「……や……あ……乳首……やだ……っ、ああ……っ」

「……」

柊さんはジュボツと乳首から唇を離し、指で弄んでいた乳首をコリツとつまんだ。

「ひう……っ、は……あ……」

「……乳首、こんなに勃てて。可愛い。」

柊さんは甘くそう言うと、優しく私のお腹を撫で始めた。

その手をゆつくりと下へとずらしていく。

「は……あ……」

そしてそのままズボンへと指が伸びていく。

「待って…柊さん…っ、それ以上は…だめ…っ」

私は必死で首を横に振って拒絶するけれど…柊さんの指はプチンと私のズボンのボタンを外し、チャックを下ろされた。

「お尻、あげて。」

命令のような…低い響き…。

「柊さん…やだ…」

私はぼろぼろと涙を流し、必死で首を横に振る。

「…俺の事が嫌いか？」

柊さんは困った表情で、ズボンの上から敏感な場所を指でぐりぐりとしながら、そう聞いてきた。

「ひう…あ…は…ちが…」

「じゃあなんで嫌なんだ？半月後にはもう、俺達は夫婦なのに。」

「あ…あ…指…やだ…っ」

ぐりぐりと容赦なくクリトリスを擦られ、ズボンというガードがあるのに…それでは庇いきれない刺激が身体に走る。

「…答えて。何が嫌？」

「……っ、は…あ…明菜と…比べられる…こと…っ」

「…あの女と？一体何を比べるんだ？」

怒った表情をした柊さんの指が、スッと私を解放してくれる。身体は…少し残念そうにヒクヒクと小さな痙攣を繰り返す。

「っ……、明菜より…スタイルが悪いし…顔だって可愛くない……から…」

比べられて、また『失敗作』と思われるのが…怖い…んです…」
熱い身体を抱え…必死で拒絶する。

「……なるほどな。俺はあんな性悪女なんて興味すらないのに。

興味があるのは、小春だけだ。」

まっすぐ目を見て、真剣な表情でそう言う柊さん…。その顔は、とても嘘をついているように見えなくて…思わず信じたくなってしまいう熱さを放っていた。

「俺は小春を愛してる。」

柊さんはそう言いながら、グッとズボンに指をかける。そしてそのままゆっくりと下着と共に引きずり下ろしていく…。

拒絶も、恐怖も、明菜への劣等感も。彼の熱い衝動がすべてを溶かしていく。
私はただ、彼に愛されるためだけに、その身を預けることしかできなかった。

（溺愛SEXの全容は製品版にて）